

「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」

プロジェクト責任者 井上順孝

1. プロジェクトの概要：「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」から「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」へ

本プロジェクトは2010年度から2012年度まで3年間にわたって実施された。最終年度である2012年度の成果の概略を示し、最後に後継プロジェクトとして2013年度から開始された「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」プロジェクトの計画についても付け加えておく。

本プロジェクトは大きく二つの目標をもつが、その一つは、2009年から運用が開始された「國學院大學デジタル・ミュージアム」(<http://k-amc.kokugakuin.ac.jp/DM/>)について、研究開発推進機構内の諸機関や図書館などと連携しながらその円滑な運営を図り、システム面の整備・改良を進めることである。もう一つは、本プロジェクト独自の調査・研究等を進めることである。

さらに本プロジェクトは、プロジェクト代表者である井上順孝を研究代表者とする科学研究費補助金基盤研究(B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」(2011～2014年度)、ならびに「宗教文化士」資格の認定制度の運営を担う「宗教文化教育推進センター」(CERC、サーク、本研究所内に設置)との緊密な連携のもとに実施されるものである。

2012年度のプロジェクトメンバーは次のとおりであった。

責任者 井上順孝

分担者

(専任教員) 平藤喜久子、星野靖二、塚田穂高

(兼任教員) ノルマン・ヘイヴンズ、黒崎浩行、齊藤こずゑ

(客員研究員) 市川収、カール・フレール

(PD研究員) 市田雅崇、李和珍、ヤニス・ガイタニディス、加藤久子

(研究補助員) 今井信治

(客員教授) ケイト・ナカイ、土屋博、星野英紀、山中弘

(共同研究員) 天田顕徳、キロス・イグナシオ、小堀馨子、齋藤知明、エリック・シッケタンツ、高橋典史、マシュー・チョジック、ジャン＝ミシェル・ビュテル、村上晶、山梨有希子

2. 2012年度の成果

(1) 「國學院大學デジタル・ミュージアム」の運営

デジタル・ミュージアムについては、基本的な公開ならびに運用体制についてはすでに確立がなされているため、アクセシビリティの改善とコンテンツの充実の側面に力を注いだ。

機構内他機関の担当者・システム担当者、ソフト提供会社の担当者等とともに、「デジタル・ミュージアム・ワーキンググループ」会議を定期的開催して、課題の共有と改善案の検討を行った。

2012年度には特に、デジタル・ミュージアム本体の改善のみならず、そこへのアクセス経路を改善するべく、大学・各機関ウェブ

サイトの構成の整備・改善案等を、各機関ウェブ担当者とともに検討した。

また、教材開発の推進の観点からは、動画コンテンツならびにスマートフォンアプリ開発と公開のための基盤構築について重点的に検討した。問題点を把握するとともに、新たなコンテンツ開発というよりも、これまでに開発・蓄積したものを活用するという方針を確認した。

なお、いくつかのデータベースについては、機構内他機関の担当者からの要請を受けて、入力・公開や改善作業の支援を行った。

全体として最終年度をむかえ、後述する本研究所作成の新規データベースも含め、各機関のデータベース類が一通り出揃う形となり、それぞれの基礎が構築された状況を整備することができたと言えよう。

(2) プロジェクト独自の調査・研究等

◇国際研究フォーラム「宗教文化教育の射程—文学と美術をめぐる—」の開催

2012年9月29日に、國學院大學学術メディアセンター1階の常磐松ホールにおいて、本研究所と科学研究費補助金基盤研究(B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」ならびに宗教文化教育推進センターの共催によって、国際研究フォーラム「宗教文化教育の射程」が開催された(本号トピック「国際研究フォーラム「宗教文化教育の射程—文学と美術をめぐる—」」を参照)。

同フォーラムでは、13時から18時の5時間にわたり4つのセッションと総合討議が行われた。発題者とタイトル、コメントは次の通りである。

・第一セッション

発題：ロベルタ・ストリッポリ (アメリカ、ニューヨーク州立大学ビンガムトン校)「古典文学のなかの宗教」
コメント：加瀬直弥 (國學院大學)

・第二セッション

発題：有田英也 (成城大学)「運命に抗う人びと—宗教で読むカミュの『ペスト』—」
コメント：伊達聖伸 (上智大学)

・第三セッション

発題：小池寿子 (國學院大學)「『死の舞踏』に見るキリスト教的死生観」
コメント：平藤喜久子 (國學院大學)

・第四セッション

発題：マーク・マックウィリアムズ (アメリカ、セント・ローレンス大学)「イエスの再生—映画、マンガ、アニメにおける救世主のポップカルチャー的変容—」
コメント：小原克博 (同志社大学)
司会：井上順孝 (國學院大學)

同フォーラムには85名の参加があり、フロアからも活発な発言がなされ、議論された。

なお同フォーラムの様子は、精神文化映像社の撮影により前編60分・後編45分の番組に編集され、衛星放送「スカパー」216chの番組として2012年10月～2013年3月にわたり複数回放映された(本号「テレビ放映・番組紹介」を参照)。

◇EOSの拡充

2012年度には、英文のオンライン神道事典 Encyclopedia of Shinto (EOS) の充実・改善作業が継続して進められた。

すでにアップロードされている本文の内容をチェックし、統一性・整合性を確保する作業については、年度を通じて実施され、かなりの部分の改善作業がなされた。

また、「Appendixes 付録」として、「神名索引」「記紀神系譜」「記紀神名対照表」の3項目が新たに追加され、その翻訳作業を完了させた。

数年にわたり課題となっていたEOS旧サイトからの機能と内容の引き継ぎ作業も並行

して進められ、大部分が完了した。

EOS 本文の一部の韓国語への翻訳も進められ、「第八部 流派・教団と人物」の翻訳がほぼ完了し、公開を開始するための校閲作業に取りかかった。

◇双方向論文翻訳

本プロジェクトでは、神道・日本文化に関する優れた研究を国際的に発信すべく、また海外の研究を日本に紹介すべく、日本語から外国語、外国語から日本語への「双方向論文翻訳」を行って、ウェブで公開する事業を進めている。

2012 年度には、次の 4 論文を選定して翻訳を行った。日本語から英語へのものが 2 点、英語から日本語へのものが 2 点である。

(1) 日本語から英語へ翻訳された論文

・平山昇「明治期東京における「初詣」の形成過程—鉄道と郊外が生み出した参詣行事—」

(英訳 *The process of establishment of hatsumōde in Meiji Tokyo : A practice of worship at the intersection of the railway and the suburbs* 翻訳者: GAITANIDIS, Ioannis)

・山田岳晴「神社玉殿の起源と特質—安芸国の玉殿を中心として—」

(英訳 *The Origin and Characteristics of Shrine Gyokuden (Innermost Sanctuaries): Evidence from the Western Hiroshima Region* 翻訳者: NAKAI, Kate W.)

(2) 英語から日本語へ翻訳された論文

・PORCU, Elisabetta, “Observations on the Blurring of the Religious and the Secular in a Japanese Urban Setting”

(邦訳: 「日本の都市社会における宗教性と世俗性のゆらぎに関する考察」 翻訳者: 加藤久子)

・McPherson, Sean “National Agendas and Local Realities: Festive Material and Ritual Culture, Nationalism, and Modernity in the

Chita Region of Japan”

(邦訳: 「国家のアジェンダと地域の現実—知多半島における祭礼資源と儀礼文化、ナショナリズム、近代性—」 翻訳者: 小堀馨子)

なお 2012 年度には、デジタル・ミュージアムのなかに「Articles in Translation 双方向論文翻訳」データベースを構築した。ここでは、これまでに翻訳された論文 27 本を、「English → Japanese」「Japanese → English」「Japanese → Korean」の 3 カテゴリーに分けてタイトルの一覧性を高めるとともに、各論文の書誌情報等を整備することで、利用者の使いやすさを大幅に改善した。

◇教派神道及び神道系新宗教の教団基礎資料のデジタル化と公開

これまで本研究所で収集してきた教派神道(神理教・神道修成派など)ならびに神道系新宗教関係の大量の文書資料については、継続的にデジタル化作業を進めてきた。2012 年度には、神道系新宗教関係のものを中心にデジタル化作業と公開に向けたメタデータ整備作業が進められた。

デジタル・ミュージアムのなかには「教派神道関連資料データベース」が構築され、神理教関係の資料から公開が始められた。

◇現代宗教に関する資料・データの収集とデータベース構築ならびに公開

宗教文化教育推進センター事業ならびに前述の科学研究費補助金基盤研究 (B) 「宗教文化教育の教材に関する総合研究」と連携する形で、主に宗教教育・宗教文化という観点から、現代宗教に関する資料・データの収集とデータベース構築が進められた。

具体的には、宗教文化について学べる国内の 30 博物館の所在地・特色・提示資料・URL の情報を掲載した「博物館と宗教文化」データベースの構築と公開、「宗教文化を学

ぶための基本書案内」ページならびに「世界遺産と宗教文化」データベースの充実化の作業を集中的に行った（いずれも宗教文化教育推進センターのサイト(<http://www.cerc.jp/>)を参照)。

◇科学研究費補助金基盤研究 (B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」との連携
本プロジェクト責任者の井上順孝を研究代表者とする本科学研究には、本プロジェクトメンバーの黒崎浩行、平藤喜久子、星野靖二、塚田穂高が研究分担者・連携研究者となっており、連携を強化している。本学神道文化学部の西岡和彦、学術資料館の加瀬直弥も連携研究者となっており、教員間でのネットワーク形成を進めている。

また2012年度には、同科研ならびに「宗教と社会」学会の「宗教文化の授業研究」プロジェクトと連携して、4月15日には東洋文庫ミュージアムにて、12月22日には龍谷大学龍谷ミュージアムにて、研究会が実施された。詳細は同科研サイト (<http://www2.kokugakuin.ac.jp/erc/index.html>) を参照されたい。

3. 2013年度の研究計画など

最後に2013年度からの新規プロジェクト「デジタル・ミュージアムの運営および教育への展開」の概要を付記しておく。

・「國學院大學デジタル・ミュージアム」の運営

2013年度からのプロジェクトでは、コンテンツの教育への利用を推進することと、動画素材その他、新たなコンテンツの開発とその公開方法の検討が重視されることになる。旧・日本文化研究所が開催した学術講演会の録画・音声データなどのデジタル化も進んでいるので、それをどのような形で公開ないし

学術利用していくかなども検討される。スマートフォンアプリを活用した公開も進められる予定である。

・EOSの拡充

EOS本文の統一性・整合性の確保・改善作業は、新プロジェクトでも継続して行う。

年表については、簡易版と詳細版の内容と公開形式を検討し、年度中のアップロードを目指す。

「第八部 流派・教団と人物」の韓国語訳についても、校閲を完了させて年度内のアップロードが予定されている。

新プロジェクトでは、教育への活用を念頭に、EOSと神道入門用サイト Images of Shinto : A Beginner's Pictorial Guide の内容を下敷きとした日本および海外の学生や初学者が学ぶのに適した日英二言語表示のコンテンツ構築を構想している。本年度はその内容についての検討と準備作業を進める。

・双方向論文翻訳

神道・日本文化に関する論文の相互翻訳については、新プロジェクトにおいても継続する。これまでの翻訳論文の蓄積を広く周知する方法についても検討を進めるとともに、ファイル情報の管理の改善を行う。

・教派神道及び神道系新宗教の教団基礎資料のデジタル化と公開

デジタル・ミュージアム内に構築された「教派神道関連資料データベース」のコンテンツの充実化を進める。

・教育への活用の重視

教育への活用に関しては宗教文化教育推進センターと協力しての教材作成と公開を進める。科学研究 (B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」との連携も継続する。

◇国際研究フォーラムの開催

2013年度は、本学で開催された日本宗教学会との共催で、9月6日に公開学術講演会「ネットワークする宗教研究」が開催されることとなった。